

「口語詩句」という詩形の中に、日本の短詩である俳句、短歌、川柳、歌謡など、さまざまなスタイルを取り込む試みが少しづつ見えてきている感じがする。それはまた、読者との対話でもあるだろう。そういう意味で今月、印象に残った作品を挙げてみる。

閉じかけた

朝顔の花の色の濃く

いつでも

死んだ人ばかり思う

作者 桜望子

——正統派短歌の感性だが、短歌の伝統に縛られず行分けにすることによって受け取る読者側の幅が広がる。

駅のホームの鏡

自殺予防なんだって

ぼんやりとうつつている自分

作者 門野あおい

——一つの発見。自分を「見る」ことによって客観視できるが、なおも残る不安が「ぼんやり」映っている。

頭よりわずかに重い西瓜かな

作者 長谷川柊香

——震災以降に目覚めた身体感覚だろうか。身体から離れた頭部だけの重さを誰が知っているのか。

月天浮遊させます盃は

どうも薄くて

花卉でも

どうぞ召し上がれ

掬水

作者 来栖 優

——大衆文芸や歌謡の感性を引き継ぎながら、その甘美さを現代詩として成り立たせている。

遠雷よ水子は兄か姉か

作者 長谷川柊香

——「よ」という呼びかけによって見えない他者が見えてくる。俳句の「や」や「かな」の詠嘆とはまた違うだろう。

思春期の入り口に立つ

五年生 娘はウフフと

笑うようになり

作者 加藤 美紀

——これまでの子供らしい笑いと違って、「ウフフ」は内部世界と外部世界がはっきり分かれた兆候。細部に重要な変化を発見する眼が確か。

捨てられた屈託を集めて売り捌く

そんな稼ぎで朝顔を買う

作者 真島

——これも短歌のリズムを借りた行分け詩の試み。短歌にすると前後のバランスが重すぎて真ん中から分断されるかも知れない。

「生き急がない」

それがどんなに難しいか

あなたは知らない

作者 板倉萌

——人は皆生き急ぐ。何を求めて、どこを目指して。急ぎを止めたとき見えるのは「諦念」か「あきらめ」か「悟り」か、はたまた「平凡な幸せ」か。

交互敷く！交互敷く！！

振れます、

時計の錘は振り子運動

夜長でしょう

作者 来栖 優

——「口語詩句」という、まだ不安定なスタイルに対する軽やかな投げかけ。

蝶々結びのように

可愛く黙秘する私

作者 宇井 麻千

——人生経験が言わせる上手い比喻。

世界中の人が一斉に
スマホから目を離すような

〇〇〇(自由回答)

作者 宇井 麻千

——読者に選択を任せて想像力を広げるというのも「アリ」だろう。これまでの、詩的暗喩の読み取りを読者に強いるのとは違って。

本当に正しいかどうかはさておき

正しいっぽい

っていう空気が

一番強い

作者 春町 美月

——日本の「世間」が持っている「曖昧な正義」という性格をズバリと表現している。